

「みどり」への想い

小松 明 神奈川県横須賀市 七十一歳

「分け入っても分け入っても青い山」よく知られた山頭火の句であり、深緑の山の情景を読んだもので、緑の印象が強く残る句である。日本は森林率六十%以上、世界的には三位にあたるらしい。上空から見ると、確かに緑が多い国だ。面白いのは都市にも緑が多いこと。日本人たちの努力は勿論あるが、日本独特の事情が。それは、神社仏閣が至る処に存在し、その神域には俗世との区分けのための緑地帯があるからなのだそう。日本人の信仰心の深さと緑との縁の深さを感じさせ、住環境と緑ということを大切にして来た祖先の姿を垣間みる思いがする。

また、日本人は古来多彩な色あいを生活の中に取り入れて来た。例えば、「みどり」に漢字を充てると、緑、碧、翠が上がるが、それぞれに趣を異にし、熟語にするとさらに広がる。彩色では萌葱、浅緑、深緑（ふかみどり）、若緑、若草、柳、抹茶などまだまだ限りない伝統的な緑系の色遣いがあり、美術、工芸、また文学や建築の世界でも空間的な広がりを感じさせる。

温暖化防止とも関連が深いこの「緑」、大切なのは当然だが、どう付き合っていくべきかが今まさに問われている。環境問題にも発展させて考えれば、山から海にまで影響する問題だ。伝統的にも、生活に根付いた緑化に対する意識を発展させ、どう後世に残して行くのか。山頭火が分け入った青い山のように、深い緑が守られて当たり前という日本でありたいものだ。